第 28 回　番組審議会議事録概要

１．開催日時

令和 7 年 3 月 24 日（月）　午前 10 時 30 分より

２．開催場所

東京都港区台場 2-4-8　フジテレビ本社　会議室

３．出席者

委員長　：吉岡忍

委員　　：渡邊健一、池田哲雄、宮崎美紀子、砂川浩慶、笹田佳宏、長谷川晶一

株式会社サテライト・サービス

石井浩二、永竹里早、窪田正利、落合祐輔、武井俊人、森本聡

株式会社スペースシャワーネットワーク

藤島克之、小林麻衣子、中澤久美子、赤川貴也、西村和晃

CJ ENM Japan 株式会社

三澤法夫、チャン　ホジュン、山川健太、北百梨香

４．議題

１）　「Little Glee Monster Precious Live コラボドキュメンタリー」

スペースシャワーTV にて令和 6 年 11 月 24 日放送

２）　「ALL!Light! ＆TEAM ～LUNÉ 大作戦」

Mnet にて令和 6 年 12 月 24 日放送

３）　その他　報告事項

議題番組について各委員から次のような意見が出された。

■「Little Glee Monster Precious Live コラボドキュメンタリー」について

- この番組のテーマは「笑顔」だと思った。生徒たちがダンス以外にもたくさんやらなくてはいけないことがある中で、発表から本番までの 4 週間で自分たちが振り付けを考えるのはすごく大変なことだと思うが、ドキュメンタリーによくありがちな汗と涙とか、失敗と葛藤とかを見せずに進んでいく。高校生からパワーをもらう、非常にいい番組。
- ダンス部は全員が仲良くて、お互い切磋琢磨し合えていて、辛い時に誰かが声をかけてくれると生徒が言っていたが、実際にそのような場面が多く、生徒たちが本当に楽しんでいることが伝わってくる。特に Little Glee Monster からのビデオメッセージを見ている子供たちの目の輝きや、イベントリーダーの子の舞台直前の笑顔がすごく印象的。
- 舞台裏のドキドキ感とか、初めての会場で部員 80 人にぶっつけ本番で指示出しているシーンなどは、本当に頑張っているなと思った。スペシャさんのプレシャスライブという企画はいつも本当に素晴らしく、音楽専門チャンネルの心意気を感じる。順調にキャリアを重ねてきた Little Glee Monster の良さもよく表現できた番組だと思う。
- ナレーションがないのはすごくいい。人数も多く、バックステージのわちゃわちゃした中でみんなが焦ったり、慌てたり、興奮したりとテンションが高いときに、ナレーションを挟み込まず、必要最低限の字幕だけなのがドキュメンタリーとして面白い。
- 何より生徒たちが明るくて初々しく、笑顔がとても印象に残った。なかなかこれだけ人気のあるプロとコラボする機会は普通ない。興奮したり、はしゃいだり、夢中になったりするということは彼らの青春の一ページとして残っていくだろう。おそらくここからプロのダンサーになる人はいないかもしれないが、ダンスでなくても何か表現をする面白さに気がつき、そのような道に進む子たちもいるかもしれない。いい思い出になるだけではなくて、何か生きる時の力になるような経験になったのかなという気もする。
- 「絵」がいい。「音が聞こえる絵」という感じがした。パンやズームの速度も含めて、Little Glee Monster にぴったりな絵を撮っていて素晴らしい。Little Glee Monster の曲を熟知しているディレクターやカメラマンが取材をしているのでは？
  一方で改善した方がいい点は「音」が取れてないこと。いいシーンでも喋りがないのはドキュメンタリーとしては厳しい。企画自体は素晴らしいと思うが、どう感じたか？どう苦しんだか？といった「喋りの音」があることで彼らの思いがより伝わるのでは？
  もう一つは、ストーリーを描いてほしかった。たとえば実は先生はかつてダンサーだったとか、部の先輩たちがスターになったからこんなに部員が多いとかの、高校生側のストーリーがほしい。Little Glee Monster 自身が極めて厳しいオーディションをくぐり抜けてきた人たちだからこそ、Little Glee Monster の思いと高校生の思いが重なり、高校生を見る Little Glee Monster の目線が温かい理由もよくわかるのでは。ドキュメンタリーと銘打つならストーリーが交わることが必要だと思う。

- ドキュメンタリー単体としてみたら、ものすごく物足りない。なぜこの高校なのか、どうしてこういう振付になったのか、振り付けのどこにこだわりがあったのか、本番までの葛藤とか悩みとかもよくわからない。テスト期間中で思うように練習ができず、不安に押しつぶされそうになったことなどもあったと思う。せめてイベントリーダー6 人ぐらいの子達の生の声を聞かせるなど、そうした彼女たちの姿をもう少し見たかった。
- Little Glee Monster のメンバーはダンス部の女の子たちと世代が近いのだから、高校生たちが努力して奮闘しているところにかつての自分を重ね合わせるとか、あるいは先輩としてもう少し優しい温かいまなざしがあるとか、事前のビデオメッセージとコンサート直前・直後だけでなく、もう少し Little Glee Monster と高校生たちとの交流の場が作れなかったのか。プロのミュージシャンの人たちと、アマチュアかもしれないけれども情熱を持って頑張っているという、共通のキーワードを持った人と人のコミュニケーションみたいのがあればもっと良かったと思う。
- あれだけの人数の集団群像劇をドキュメンタリーにするのは難しかったと思う。本来ドキュメンタリーであれば、改めてどこかでインタビューするなり、学校で練習している場面だけではなくて家を訪ねたりとか、友達と一緒にいるところに取材を入れたりするものだが、30 分という番組の中でそれをするのはかなり難しい。ただ生徒たちがスマホで撮った自分たちの練習風景をテンポよく編集している部分は、ある種の映像的な新しさ、面白さがあった。その練習の時に何気なく口から飛び出した言葉をいくつか並べて、映像と音一言ずつをテンポ良く編集できれば、そこから生徒たち一人一人の内面のドラマも浮かび上がってきて、集団群像を描くスタイルが確立できたのではないか。

委員からの意見に対し制作サイドから
（スペースシャワーＴＶ　小林麻衣子氏、中澤久美子氏、赤川貴也氏）

- 昨今は高校のダンス部とのコラボのオファーがとても多くハードルが高い中で、プロデューサーが熱い思いの手紙を送り、高校の方々にやる意義を感じていただいて企画が成立した。そうした経緯を番組に出しても良かったかもしれない。
- 撮影は Little Glee Monster さんをずっと撮っている方にお願いしたので、いい絵を撮ることができた半面、構成やストーリーの要素という面では弱かった。大事な「声」が取れていないという点は大きな気づきでした。
- ドキュメンタリーとしてはストーリーを作りきれていないという厳しいご意見もいただいたが、よい評価もいただけたので、それを参考に今後よりいいものにしていきたい。
- プレシャスライブという企画は十何年も続けているが、これまでコラボの部分だけを単独のドキュメンタリーにしたことはなく、今回初めて高校生をメインとしたドキュメンタリーを企画した。今後はアイドルの方と合唱部のコラボを考えている。高校時代に音楽に触れることで、将来の職業にするまででなくても若い世代に何かしら影響を与えることができると思う。スペースシャワーとしてもこうした企画を増やしていきたい。

■「ALL!Light! ＆TEAM ～LUNÉ 大作戦」　について

- 多国籍のグローバルなグループの可能性を感じた。日本でも地域によっては小学校のクラスで日本人の方が少ないほど多様化が進んでいる中で、こういうグループが出てきたのはよく理解できるし、出てこなきゃいけないなとも思う。多様化が進んだ時に、韓国でもなく、台湾でもなく、日本でもない文化があるという新しいビジョンを出してくれるとすれば、素晴らしいアートを生み出す＆TEAM の可能性が開かれていると思う。
- 9 人それぞれの個性をファンは知っていると思うが、全く知らない人にとってはわからない。ただ町の皆さんを笑顔にするという一つの目的のために自分は何ができるのかを話し合う場面で、自分はダンスが得意だから子供たちに教えることができるとか、自分は語学が堪能だから街の魅力を外国語で伝えるといったお手伝いが、年齢差もあり国籍も違う彼らの異文化交流とか異世代交流みたいな側面が表現できて、メンバーの個性が際立ってくるのかなと思う。結果それぞれのグループがキャンプ、漁業、農業と、町の売りにしたいところをちゃんと分けられていて、勝浦という街の紹介にもなっている。企画がとても練れられているとは思わないが、これから番組は楽しくなりそう。
- バスの中でのエビのくだりが彼らに興味のない人にとっては一番どうでもいい部分のようだが、ファンにとっては一番美味しいところかもしれない。これからコンテンツをテレビ以外でも展開していくとすると、普通のプロならカットするくだらないところが逆にきっと大事になっていくのだろうと思う。
- ファンが見る番組、もしくは気になっている人たちに見てもらってファンになってもらう意図の番組だと思うが、プロフィールの「好きなもの」とか「僕しかできないこと」がそれぞれの推しを作るきっかけになるのだろうか？ファンにとって、もしくは興味がある人にとっては面白い番組なのかもしれないが、会話にもなっていないものがそのまま流れているようで、もう少し演出をしたほうがいいのではないか。
- 最初の方のロケバスや俳句をやるシーンをもっと削って、早く次の話を膨らましてもらいたかった。一方で 3 つのグループに分けないで 9 人で野球をやるなど、全員で共同作業に取り組むのもいいかと思った。
- アイドルのバラエティ企画としてはゆるい。他番組の模倣というか、普通に思いつく程度の企画。むしろ番組の完成度よりも、＆TEAM を売り出していくための映像コンテンツとしてどう展開していくのだろうかという、ビジネス戦略の方に興味を持って見ていた。これで YouTube に勝てるのか？とは思うが、逆にテレビの優位性を示そうという発想自体が今やアイドルの動画市場にとってはナンセンスなのかなとも思った。
- 勝浦の人たちのお手伝いをしたいというコンセプトは、いわば誰にも好かれる好人物のイメージ。新しい才能や新しいアートを生み出すなら、もっと意地が悪く、難しい問題や、ひとひねり加えたテーマを与えることにチャレンジしてもいいのではないか。
- せっかく文化の違う三つの国出身の若者たちのグループなのだから、良い意味でのそれぞれの相違点や共通点をもう少し意識した方がいいのでは。

- ＆TEAM の YouTube コンテンツを見たが、ダンスもうまいし歌唱力もあるが、韓国だけのチームや日本人だけのチームでも同じようなパフォーマンスになる。せっかく台湾、韓国、日本の三つが集まっているのだから、全く違うビジョンができると思う。
- ドキュメンタリーでもないし、何かを達成するものでもなく、コンテンツの狙いとしてそれぞれのメンバーの個性を味わってもらいたいということがゴールだとすれば、それはちゃんとできている。ビートルズが最初映画を作った時も、ただ走ったり、電話かけたり、ストーリーになってないし、そもそも演技しようという気がない。でも大人の価値観や枠組みにはまらないところにファンは共感した。それと似たものを感じた。さらにビートルズの映画が大ヒットしたのは、合間に歌唱シーンが入ることによって、こんなにすごいパフォーマンスする人がこんな素顔なのだという多様性を表現したためで、この番組も彼らのパフォーマンスを入れていけばずいぶん見え方が違うのでは思う。

委員からの意見に対し制作サイドから（CJ ENM Japan 北百梨香氏）

- ＆TEAM の知名度を上げることがこの番組の制作意図となっている。9 人という大人数のグループのため、今まで個人のキャラクターがあまり生きていなかった部分があるので、メンバーそれぞれの個性が発揮できるような企画とした。
- 各事務所側がいわゆるデジタルプラットフォームでも自主コンテンツを出している中で、我々がどういったものを見せていくべきなのかを模索している。結論としては、ファンはやはりカメラの裏側の顔が見たいのではと考え、こうした「ゆるい番組」の作りとなっている。
- 戦略として韓国、台湾、日本の三カ国のメンバーそれぞれの違いをあまり感じさせないような演出にあえてしている。特に今回は日本でもっと知名度をあげていくために、日本の勝浦でお手伝いをするロケとなった。現地の方々と触れ合う場面が今後出てくる。
- 色々なシーンでメンバーが話していること、やっていることはアドリブで、全く台本には書いていない。大喜利も地上波の出演が多いメンバーK さんの「バラエティ力を高めていきたい」という意思でやっている。五七五も EJ さんの特技として今後も毎回行っていくので、温かい目でみていただきたい。
- 普通だったらカットするようなシーンもたくさんあるというご意見をいただいたが、ファンの方が一番喜んでいただけるのは、台本で作り上げられていない部分ではないかと考えていて、予定にないシーンたくさん入れている。
- 合間にパフォーマンスシーンを入れては、というご意見もあったが、最終話では体育館を借りて地元のよさこいチームやキッズダンスチームの皆さんと一緒に踊ったり、最後に今回のお礼として＆TEAM の楽曲をフルでパフォーマンスをしたりするシーンがある。9 人の共同作業も体育館の飾り付けを全員で手作業している。

■その他事項として、株式会社サテライト・サービスの番組供給者である株式会社フジテレビジョンに関する一連の報道について、石井社長から各委員に以下の報告があった。

・ 株式会社サテライト・サービスは株式会社フジテレビジョンと別会社ではあるが、株式会社サテライト・サービスの社員は株式会社フジテレビジョンからの出向兼務社員となっているので、この番組審議委員の皆様にもご不安を与えるとともに、ご心配をおかけしていることと思う。大変申し訳ない。月末に第三者委員会の発表があるが、それを待つまでもなく会食のルールなども含めて、新しい経営陣のもと再生に向けての取り組みを進めている。衛星放送事業に関してはスポンサーからの広告収入を柱としていないため、いまのところ大きな影響は今のところはない。プロ野球の中継も変わらず放送する。

これにたいして委員の方から以下のご意見をいただいた。

・ フジテレビは「楽しくなければテレビじゃないと」を打ち出してきて、それがよい効果を生み出してきたと思うが、この問題が起きた時に「まだこんなことやっていたのか」と、古さを感じたことは事実。たまたま今年が放送 100 年という節目にもなる。本当に楽しいもの、面白いもの、あるいは斬新なものとはなんだろうかということを検証しつつ、新しいフジの姿というものを作っていただきたい。

次回予定
・次回は令和 7 年 7 月開催を予定。
・議題はフジテレビ ONE スポーツ・バラエティとディスカバリーチャンネルで放送される番組の予定

以上